多彩なライフスタイルを描くまち 真庭

Maniwa Public Relations

広報真庭

9
2019

第173号

主な記事

●特集　真庭のミルク　P02～
●市政トピックス　P10～
●お知らせワイド版　P12～
●真庭が好きっ読者の広場　P24～
●真庭人　山田昌子さん　P28～
●健康のススメ　P29～
●ぐるっと真庭 まちの話題　P30～

好きです、牛乳。

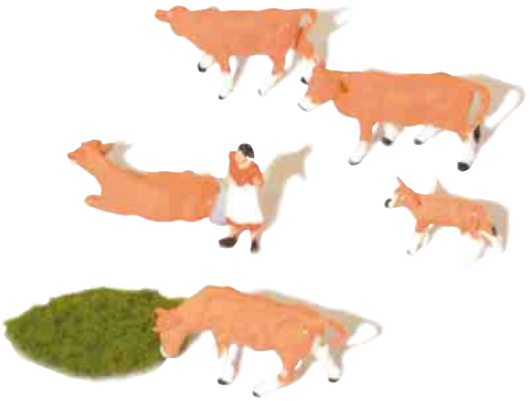
8月10日、蒜山ジャージーランドでジャージー牛の乳しぼり体験が開催されました。この乳しぼり体験は、4月下旬から11月上旬の土日祝日などに行なわれています。参加者した人たちはスタッフと一緒に牛の乳しぼりを行い、体験後にジャージー牛乳のプレゼントを受け取っていました。

真庭のミルク

昨年10月、ご当地ヨーグルトなどの乳製品に関する全国初のイベント「第1回全国ヨーグルトサミット」が茨城県小美玉市で開催されました。
第2回のヨーグルトサミットの開催地は、日本一のジャージー牛飼育頭数を誇る真庭市。その牛乳や乳製品は市外の人たちにも人気の商品。観光資源としても大きな役割を果たしています。
今回はヨーグルトサミットに向け、蒜山地域の酪農の世界を覗いてみましょう。

国内で飼育されている乳牛の多くはホルスタイン種

国内で飼育されている乳牛は約130万頭といわれていますが、その99%はホルスタイン種。乳量がとても多いため世界中で最も多く飼育されています。
真庭市でも多くのホルスタイン種が飼育されています。



実は日本一の飼育頭数 真庭市のジャージー種

蒜山地域などで目にする小柄の茶色い牛はジャージー種。約１万頭が国内で飼育されていて、その内なんと約2,000頭が蒜山地域で飼育されています。そう、真庭市のジャージー種の飼育頭数は日本で１番多いのです。
ジャージー種はホルスタイン種に比べると体も小さく、乳量も３分の２程度ですが、牛乳に含まれる脂肪分、タンパク質、ミネラルなどが豊富で、濃厚な風味とコクが特徴です。また、淡い黄色身を帯びていて、原産国のイギリスでは、「ゴールデン・ミルク」と称されています。
蒜山ジャージー牛乳は、給食として市内の小中学校に届けられています。

酪農のはじまり

今では当たり前に身の回りにある乳製品ですが、
私たち日本人はいつから牛乳を口にしているのかご存じですか。
日本における酪農の歴史を調べました。

牛乳は貴重な飲み物だった

日本に牛乳が伝わったのは飛鳥時代だといわれています。当時は身分の高い人しか口にすることのできない貴重なものだったそうです。

その後、江戸時代に徳川8代将軍吉宗が、牛の飼育を始めたのが酪農の発祥だとされていますが、この頃も牛乳を口にできたのはやはり身分の高い人たちだけのようです。

近代になり増えた牛乳の需要

牛乳が一般に広まり始めたのは明治時代。戦時中は、傷病兵などが栄養剤として飲んでいました。

昭和29年川上中学校でジャージー牛の譲渡式

昭和25年に牛乳の配給統制法が廃止されたことで、家庭での牛乳や乳製品の消費が急増し、学校給食には大量の脱脂粉乳が輸入されていました。そうした状況の中、国内の牛乳生産を増やすための計画が作られ、県内にも次々と酪農を始める人たちが現れました。

ジャージー種は急傾斜地でも草を食べ、山間部での放牧飼育に適しているとされ、蒜山地域での導入が進みました。

昭和30年から高度成長時期になると、海外の食文化が取り入れられ、人々の食生活は大きく変化しました。こうして日本人も牛乳や乳製品を口にする機会が増えました。

放牧されている牛たち

酪農導入から約60年 3代続く農家も

県内で酪農が盛んになったのは今から60年前の昭和30年前後。ジャージー牛も同じ頃に蒜山地域での導入が始まりました。以来、「牛乳は牛から搾るものではない。牛乳は飼料から変化製造するものでもない。牛乳は畠(はたけ)から生産されるものだ。」という理念を守り、土づくり、草づくり、牛づくりを基本とし、取り組んできました。

酪農家たちは60年の歳月をかけ親から子へ、子から孫へと3代にわたり牛の世話をする生活を続けてきています。それらの日々の積み重ねが今の美味しい牛乳になっているのです。

長恒　充さん(蒜山下徳山)
蒜山酪農農業協同組合
代表理事組合長

酪農と家族

牛乳を作っているのはどんな人たちなのでしょう。蒜山西茅部で酪農を営む樋口貴明さん一家を取材しました。

樋口貴明さん（蒜山西茅部）

樋口貴明さんは、祖父の代から続く酪農を継承し、家族で約50頭のジャージー牛を飼育しています。貴明さんが酪農家を志すようになったのは15歳のとき。それまでも家業である酪農の手伝いはしていたのですが、父親が早逝したことが大きな転機となりました。「父が生きている間は、あまり考えたこともなかったし、他の仕事をしてみたいと思ったこともありました。」貴明さんは当時のことをそう話します。

母親の由美子さんは、酪農をやめようと考えたそうですが、貴明さんの口からは「酪農をする」という言葉がでました。由美子さんはその言葉に応えるため、貴明さんが就農するまで1人でも続けることができるように牛の頭数を減らし、貴明さんが酪農大学校を卒業するまで牛舎を守り続けました。貴明さんは全寮制の酪農大学へ進学した後も由美子さんの手伝いするためよく家に帰ってきていたそうです。

酪農の仕事は乳牛の生活と一体となっているため、家族経営で行なわれることが多いのですが、生前、父親に酪農を継げと言われたことは1度もなかったそうです。

「ただ、父がよく『仕事は楽しくせんといけん』と、口にしていたのは覚えています。でも、いざ自分がやると、いろいろな壁にぶち当たります。20代の頃はとにかく時間が足りなかった。牛の世話や牧草地の管理、いつも何かしないといけないことがあって。経営の中での葛藤はいろいろあります。今は育成牛舎を建てたいと考えています。経営者として、常に数字と向き合っていく毎日。」そう話す貴明さんも3児の父。妻の佳寿江さんと協力しながら仕事に子育てに精を出す毎日が続きます。

貴明さんは地域のことも頑張っています。「蒜山地域は酪農家も多いし、周りの人たちからいろいろアドバイスももらえます。青年部のみんなで蒜山ジャージーランドの草刈りや整備をしています。現状維持をしていくことは大変なんだけど、10年後、20年後もこの地域をみんなで守っていきたいと思います。まだまだ自分にやれることはあるし、やらないといけないこともたくさんあります。そのためにも、体調管理には気を付けています。健康第一です。」今日も家族のため、地域のため、牛のため、汗をかきます。

貴明さんの仕事場は父親から受け継いだ牛舎。酪農家の朝は早く午前５時30分から飼料をあげたり、搾乳をしたりします。貴明さんの牛舎ではそれぞれの牛に与える飼料の量を牛舎に書き記してあり、家族の誰でもできるようにしています。

日中に牧草地の管理などを行います。上の写真は、牧草をラッピングしたロールサイレージ。蒜山の酪農は、飼料の自給率の高さが特徴の1つ。牧草地を大切にしています。

育児も夫婦の大切なつとめ。職住近接である貴明さんの仕事場はそのまま育児の場になります。お子さんは貴明さんと同じで大きな乗り物が大好き。

夕方、牛舎をきれいにし、午後５時30分頃から２回目の搾乳。結婚するまで酪農はしたことがなかった佳寿江さんも慣れた手つきで搾乳をしていきます。

酪農と地域

牛との関わり方は人それぞれ。独自の工夫でいろいろなことに取り組んでいる筒井省悟さんにお話を聞きました。

筒井省悟さん（蒜山上徳山）

筒井省悟さんは、休日のない酪農家の代わりに牛の世話をするヘルパーとして、蒜山地域の酪農家37軒の牛舎で酪農業と向き合ってきました。

ヘルパーとして活躍してきた22年を振り返り、「ホルスタインとジャージーでは牛の気質も全く違うし、農家によって飼育方法や仕事の流儀は違います。その農家のやり方に合わせて世話をすることが大事です。この仕事をして、いろいろな農家と話をすることができてとても勉強になりました。」と省悟さんは話します。

ヘルパー業の合間をぬって、省悟さんは牧草地の管理もしていますが、最近はイノシシやシカが牧草地を荒らしてしまうことが多いそうです。省悟さんは4年前に猟師の免許を取得し、イノシシを捕まえるための箱わなを仕掛け始めました。「イノシシを捕まえるために使っているのは牛の残した飼料。檻の設置などにも農業用機械が役に立ちます。もともと牧草地を守るために始めたことだし、牛飼いならではの狩猟ですね。」そう話す省悟さんの信条は、何でも自分で調べて、やってみて、それから発言するというもの。そのため、ほかにもいろいろな活動をしています。

たくさんの人に蒜山の牛乳を知ってもらおうと蒜山酪農農業組合と一緒にTシャツを考案して、ジャージーランド限定Tシャツとして展開したり、「ひるぜん焼きそば好いとん会」など地域の活動にも精力的に参加したりしています。

「参加してみないと何も分からないし、何をするにしても、人とのつながり、地域とのつながりは大切です。地域のお祭りも若者を誘ってみんなと一緒に盛り上げていきます。」と地域への思いを話す省悟さん。

ヘルパーとして酪農家を助けてきた省悟さんですが、引退する先輩酪農家から牛舎を譲り受け牧場経営を始める準備をしています。「これから経営者として数字と向き合っていくことになると、改めて大変な仕事だと感じています。機械など道具を大切に扱うこと、牛の様子を1頭1頭観察していくこと。小さなことかもしれないけど、365日続けていくとその成果は大きなものになる。妻と2人でしっかり牛を飼っていこうと思います。」とこれからの覚悟を語ってくれました。

牧草地がイノシシに荒らされると、牛の健康にも影響が出ます。蒜山地域のきれいな景観を守るためにも、牛の健康のためにも牧草地の管理は大切です。

牧草地を守るためのイノシシ猟。
牧草地の見回りと一緒に行っている箱わなの確認は欠かせません。

蒜山上徳山「鳩ヶ原」での茅刈りに参加したり、地域の夏祭りの実行委員をしたり。地域の人たちからも頼りにされています。

蒜山酪農農業組合と連携し製品のロゴや成分表をあしらったTシャツを作成。蒜山ジャージーランド限定商品です。自身のインスタグラムでもトラクターや茅と一緒に撮影した写真を発信しています。

酪農家から消費者へ「美味しい」を届ける

今では市内全ての小中学校に給食として並ぶ蒜山ジャージー牛乳。
その牛乳を酪農家から集め、加工、販売を行っているのが蒜山酪農農業協同組合です。
組合で働く中村貢易さんにお話を聞きました。

酪農家とともにある組合

蒜山酪農農業協同組合は蒜山地域にジャージー牛が導入されて間もない昭和31年に設立。昭和60年からは、今や蒜山のお土産やふるさと納税の返礼品の定番となったヨーグルトの製造、加工、販売が始まりました。

「当組合では、蒜山地域のジャージー牛から搾られた牛乳だけで乳製品を作っています。」と胸を張るのは生産課長の中村貢易さん。組合では、牛乳を集めたり、加工したりするほか、酪農家の仔牛の育成や蒜山ジャージーランドの運営もしています。

「私の祖父も開拓団の一員で、ジャージー牛の飼育をしていました。私も酪農をしていたこともありましたが、縁あって組合で働いています。」貢易さんは酪農経験者ということもあり、育成牧場など牛と直に関わる専門性の高い仕事を任されています。育成牧場には約450頭の牛がいて、妊娠8カ月になった雌牛は酪農家の元に戻り出産します。

中村貢易（みつやす）さん（蒜山下長田）
蒜山酪農農業協同組合 生産課長

乳搾り体験の説明をする貢易さん

酪農家の代弁者として

蒜山ジャージーランドは組合直営のレストラン、売店として平成8年にオープン。そこを訪れる観光客にもっと楽しんでもらおうと、夏休みなどに行なわれているのが乳しぼり体験です。中村さんは自ら観光客の前に立ち、ジャージー牛の説明、乳搾りのやり方などを説明します。「やっぱり1番嬉しいのは、目の前で牛乳や乳製品を美味しいと言ってもらえるときです。生産者は普段、そういった場面を目にすることが少ないかもしれませんが、我々は組合員たちの代弁者として、牛乳や乳製品などを美味しいと言ってもらえるように取り組んでいきます。」と貢易さんは笑顔で話してくれました。

食べて、飲んで、楽しんで。
全国のヨーグルトが
蒜山高原に集う。

YOGURT SUMMIT

岡山県真庭市蒜山高原は酪農が盛んで、ジャージー牛の飼育頭数が日本一。
そんな真庭市で、各地のご当地ヨーグルトが集う「ヨーグルトサミット」が
開催されます。
食べて、飲んで、語って、遊ぶ、100%ヨーグルトを楽しむイベント。
ぜひみんなで来てね！

第2回全国ヨーグルトサミットin真庭

9/28（土）シンポジウム・ワークショップ

全国各地のヨーグルトメーカーによる事例発表や講演など、楽しいワークショップを開催します。
※事前申し込みが必要です。

会場　休暇村蒜山高原ほか

9/29（日）ご当地ヨーグルト物産展

全国各地のメーカーが出品。
こだわりヨーグルトを販売します。

会場　蒜山高原（三木ヶ原特設会場）
9:30-15:00

共同開催
海の市山の市 2019真庭

お問い合わせ／農業振興課（担当：馬野）TEL.0867-42-1031（FAX.0867-42-3907）

第2回全国ヨーグルトサミットin真庭